歌集

過きし一と影遠き子らへ

第二

始

特223
728

歌集

過きしこと影

遠き子らへ　第二

過ぎし一と影　遠き子らへ（二）

壽府再來……一
君が招待……二
酷暑……四
巴里ガール、ド、リヨン……七
七月下旬のアルデン……一〇
七月廿七日……一五
在武府舊七月十三日夜……一七
八月十五日……一八
交際期早々より……二一
武府に於けるアンスチチユー……二五
大正十二年1923八月廿九日第四聯盟總會……二六
翌朝のアリアナ……二九
大正十二年1923九月一日……三〇
日曜の朝……三七
聯盟總會の第一日九月三日……三九
シヤモニーへ……四一
大正十二年1923十月十六日第五回勞働總會……四三
アルプ行……四三
待の要友……四五
大正十二年1923十二月六日リユクサンブール國へ……四七
大正十三年1924一月十六日法議會へ壽府に……四八
大正十三年1924サレーブ(27-1)……四九
昨夕の二三語……五〇
武府二月交際期……五一
兒童等の感謝……五三
四月の武府……五五
春の草花……五七
森の八重櫻……五九
同八月維納に於けるアンスチチユー……六二
同八月第五回聯盟總會にコルバン夫人邸茶の會……六六
樹下……六八
君が時……六九
催し用……七三
日曜（7—9）……七四

日曜(14—9)……七五
日曜(21—9)……七七
日曜(28—9)……七八
雨……八〇
右聯盟總會開會……八四
第一日より
同十月六日歸武……八九
年の暮頃より……九〇
大正十四年1925
八月海牙に於け
るアンスチチユ
ー……九八
同十四年1925
九月第六回聯盟
總會……九九
メトロポルの窓
より……九九
植物園にて……一〇一
ホテル、メトロ
ポル九月十日……一〇三
折々と過し年々……一〇五
人の言より……一〇七
心ある人々……一〇九
我を顧む……一一四
壽府よりウエル
ダン經由歸武……一一五
後年一春壽府よ
り武府へ武府に
近づきて……一二一
武府一秋の一午……一二三
後
バルカンの或國
の首相……一二四
昭和五年 1930
三月西より東へ……一二五
繰返しの大旅行……一二八
遠き子等へ……一二九
昭和六年 1931
元旦……一三一
正月……一三三
或大國の眞面目……一三九
母樣方……一四一
有爲の人……一四三
霜の花……一四五
白雪……一四七
黄昏……一四八
嵐……一四九
春……一五〇
砂山……一五一
花の畠……一五三
暮秋……一五六
黒鳥……一五八
アムステルダム
ムユーゼ……一五九
海牙に於ける
繪畫一共進會……一六一
夢言遠き子等へ……一六三
冬の書齋……一六四
舊友の情……一六六
大寒……一六九
大寒續き……一七〇
年暮……一七五
祖父上……一七七
年暮續き……一七九
大寒後の菊……一八一
アブニユ、ール
イスの初春の我
庭……一八五
パーク……一八八
武府の田舍……一八九
子等への手紙……一九一

我書齋五月……一九三
あの方等……一九五
五月の其處此處……一九五
松林……一九八
御親切の方……一九九
初夏……二〇〇
御繰返しの御親
切の方……二〇二
歸宅……二三一
ウオルベー……二三四
遠き子らへ……二四二
重ねて

附錄

遠き子らへ……一
當府への時變……二
書類より……六
一系……七
一系……八

過ぎし一と影　遠き子らへ（二）

壽府再來（3-7—1923）

オングロ、ルメース、君が主宰會壽府（ジュネーブ）に七月三日にボリバージュにと

隣室に唯人ならぬ振（ふ）り〳〵とモンテネグロの若き妃と君主（きみ）

隣室の聲の渡（わた）りて清ら氣（け）の言（こと）の床しさ人をしぞ思ふ

國民は大國民にならむとて君も捨てにし國も捨てしと

グランジュにて

賢しや三つの兒とても人種にはとかく思考ふやシノアと眺めつ

君が招待外部よりは重に（6-7—1923）

晩餐は洪羅代表米英學者波代夫妻と局長夫妻

別るる折ふと花捧げむと人持ち來言あるべきにと我は言葉を

此花を哀む意味に許されて伴はれかし惠みある友

言の意に人は物受く次第なり裕なる人に物捧ぐるには

花の意に答ふる心地の友達の留守の子へもと惠み渡ると

此花と今宵の興を語りつつ別れ惜みつつ家路への我

贈るにも立派の畫面あればこそ物の心も徹るなりけり

障りあり參加せざりし夫人へは心懸けたる花束を夫に

十年後晩餐に海牙に夫の方君が許にと時を移せり
識者方其夫人方の集合の

此識者君が晩餐にて久々と壽府も加奈太も語り合はせり

我等のアパートに歸れば

えも云ひぬ美事の花の萎れ居し待ち詫び居寢むる人の疲れも

酷暑中　アリアナ、カンバーナの大木の下
千八百十八年種子を蒔きたる Cédre du Liban (7-7—1923)

夏風や夢の様にと歴史をば世紀を越ゆる大木の蔭に

世紀經し大木の下に夢ごとく歴史を語る松風の音

アリアナのカンバーナ家の邊りこそ夏も知らずの自修室かと

大木の涼しき蔭にカンバーナ世の熱さをも知らぬ様なる

重荷引く人の過ぐれば木の下に涼しく書讀む我や苦しも

洪羅事件の始末を偲びて

日を夜へと勵み續けて成功の人清水飲むごと此處に來なばやと

朝露の消えぬ木蔭に此頃の日を夜に繼げる疲れ忘るるを

蔭深き夏樹の許に孔雀鳥羽根長引きて我を訪つる

聯盟の一局長 Varlez 夫人

不圖も友も來會ひて木の下に涼しく語るアリアナの庭

洪羅事件の始末

此始末世界は讃へにし君が能力北米邊は殊更に現今も

世の常のさまにもあらぬ此園の夏に引かるるや總長夫妻も

雨傘や夕立なくて椅子蔭に我待ちながら我に忘れらる

些細の事にも三省祖父上を偲ぶ

酷暑にて三度省みる御教へも忘れたりにし結果とぞ知る

壽府より巴里、ガール、ド、リヨン（8—7—1923）

四方よりの汽車の一時に着きたれば荷物運搬人なきまま旅人困りし

やうやくに荷物運びぬ待つ人も車もあらぬ日曜の夜

遅るべき汽車の遅れず着たきれば迎への人も來らぬ譯かと

遅れたる通知のみ知り遅れずに進みし汽車と知らぬ間違

アンリーは我等迎へと行きたれど我等は既に旅館の内 Hôtel Wagram

客に飽く巴里のホテルにあるなれど心盡しの事々の現ゆ

酷暑のルーブル店双方とも愛嬌のある處なれども

賣る人も物買ふ客も酷暑にや聲高らかの言葉も洩るる

佛語修養の意にて第四回 Henry Bataill の作
La Marche nuptiale を聽く

ニユプシアル、マルシユのピエス見る毎にピエラの技能の進むに驚く

込み入りしブラン〳〵の間にも君は果せし語學の研究

ブラン通り君は果せり請はれたる人にも會見ひし談合會にも

人の言ふもあり

願はれてもテアトル、ブラン(セー)などへはとブルワルの笑ふテアトル
へはと

七月下旬のアルデン

リラの垣花はなけれど涼しげに小蔭つくりて旅人迎ふ

走り來つつ我手を求むる幼子に我子の昔思ひ出さる

此春に拗ね隱れたる幼子も言葉綴りて我等迎ふを

客滿ちて手廻りかねて我等さへ十時になりて夕飯を見る

繫ぎ置く山羊の圍りに他のものは離れぬ情のあるものといふ

一疋さへ繫ぎて置けば他のものは寄り來つるなり遠走りせずと

五十五年病まれたりにし叔母陛下御崩御ありと悲む人等

折角に植ゑし人參一本も殘さず喰ひし兎憎しも

レオポルド第二世の塔

竈ごと暑さに燃けし此塔は冷ゆるも遲し壁厚くして

暮るるまま色變へ移つる大空に新月見ゆるアルデンの城(21—7)
七日目

腰掛の前の小森の薔薇の花いと美しも清げなる夕

白赤と紅黄色とあるなかにリラ色薔薇の珍しきかな

美しのウイラの中には住むなれど見せまほしもこの珍しの花

絶えまなきオートの塵を風上に避けて眺むる清き木の下

小椅子持ち場處撰ばむと月影に佇む夏のアルデンの城

風もなく暑さも緩き夏の夜の月を背負ひて城を眺むる

花を見月を眺むる折ふしの思ひは遠く老人の上

何時とても心の緩む時得ては我心出立つ彼方の方へ

遠村の犬の遠吠聞ゆなりアルデン城の夏の夜の月

讀み返す Le "Menteur" も數々と教ふる節の多きものかな

待ち詫びし月は雲間に折々と憂き氣に照らすアルデンの野

谷深きアイオギ川の音ききて爽かにあらぬ月の影照らすを

昨夕よりは雲稍々薄しアルデンの月は映れりアイオギ川に

君へ贈られたる筆者 Vte. Davignon の La "Querelle" を讀みて

ワロン花フランドル地に咲かしても美しきとこそダウイギョンの說く

情を盡し心を碎くラ、ケレルにて人種の嫌ひ溶解きしダウイギョン

滿月に近き月

美しと仰ぎて共に語りなばなほ美しの夜なりしと我

秋さへも稀に見られむ美しの月夜に我は獨り步みぬ

雲に閉ぢ雲に離れて照り渡す此明月は神に似るかな

バルツンも寫しかぬらむ明月に照され變はる空の浮雲
Bartson白の名高き畫師

アルデンにて七月廿七日　大正十二年 1923

アルデンの奥の山邊の小雀も八千代と歌ふ君が今日の日

アルデン城縁の森の小鳥まで君が齢を壽ぐとぞ聞く
夢にさへ身を厭はれて世の爲めと千代もと祈る鳥の聲かな

皇邦への奉仕の御爲めより

アリアナのセドールの種子ごと幾千代へ君が御業の殘れませよと
天地を照らす今宵の滿月は世の亂れをば笑ふさまなる
仕合に月ある頃にアルデンに夜な〳〵眺む四方の景色を

在武府舊七月十三日の夜

今宵こそ亡き方々の御魂をば迎ふる夜とぞ卿つ外國
古への月を眺めて故郷を慕ひし人の情をぞ想ふ
土臺あれと滿つる御知識持たれたる祖父様よりの御育成を
孝經も幼にて解す御恩の程心の根本を祖父様より

昔しの一夜

孝經を說きて聞かせと漢學者親戚方の我への御言

試みたる方は喜び驚きて祖父への禮を重ねられしを

大正十二年 1923 八月十五日

夕刻にムーズ河畔を過しつつアルデン城に赴くの時

美しきムーズの岸に夏の家咲く花ごとく林に混じれる

雨降ればムーズの岸もいとどしく秋の氣滿つる今日の夕暮

飽ねども走る車に餘義なくも繼ぎ繼ぐ景色眺め初むる

アルデンの庭

吹き寄する風の波立つ草の上垂るる木蔭に夏忘れ讀む

交々と敎を乞はるる初弟子にゴルフの敎師疲れ果て見ゆ

グリーブの實は赤々と熟せども人足繁く鳥は來らず

やうやくに踏み分けたりし草叢を燒野となせし暑さ思はる

美はしき薔薇を活けたる鉢据ゑてポナペチーと人は往き去る

神のみは我行末を知り給ふ我等は盡せ日々の本務を

雨除けて木蔭に居れば小鼠等夜と思ひてや群がり走く

雨降れば大木の下に蟠まる枝に包まれ夜の様を見る

水に見るアルデン城の夜の影あら美しや夢の宮殿のごと

如何にせむ我滯留は四日のみ殘れる今日の晴れの貴重さ

願ひ叶ひ雨は夜のみに今朝よりは日も照りかけて青空も見ゆ

風のまま雨雲失せて見え初むる青空眺め我は喜ぶ

伊香保寫す英語の記事を開き見て子等と過せし昔をぞ思ふ

落ち初むる黄色の木の葉敷く庭を夏の日洩れて照らす夕暮

何人も空を眺めて憂ひつつ願ふは晴の天氣なるらむ

交際期早々より人々が(1923—1924)

驚きつつ崇めたりにし二方の日に〳〵勵む規律的のを
あの樣に精勵あれば優秀も成功とてもあるべき筈と
見居しにや小森の下の自家用の椅子並せたる君の書齋も
寸時をも惜みて使ふ君が時學生時よりもなほも規律を
食堂もアパートにへと整へり出逢ふ人とて殆どなかりし
夏場なる盛りの場處にあるなれど君は自由に君の時をば

晝も夜も近代流行のジヤズの響絶え間もなきの食堂なりしも
城持ち自由に年の半をも暮らす友等も偲ばれし我
歐州の外交(官)首席の大抵は夏の月日は其國元に
昔なる本邦(外交官)シエフの方々の夏の期過す田舍家も現ゆ
昔なる夏の期とても公館護る巴里の姿の雄々しき樣も

御依頼にて夏期中も

三四ケ月も公務に耽り續き經し其健康も崇むのみなり

田舍行のシエフに次ぎつつ其翌に乃木大將の來巴の御事も

英帝の戴冠式よりの御歸りがけにて

仕合にも豫報に總て都合よく乃木大將を御待遇し得しも

御出發後出來すべき御寫眞につき

安達へと出來し御寫眞敢てすと記名は後にと御寄贈ありしを

巴里より君の歸朝の其折は大將は亡し御寫眞は我家に

大正十二年 1923 八月十日武府に於けるアンスチユーの折

催したる晩餐會を（實際八十九名の共餐者） 國際法學會

人　言

四方よりの學者を籠めし大晩餐の世の常ならぬ高雅の極と

宮相も內閣員も白國側名家大家も夫人方共

四方よりの花の種類の出で揃ひ主人と共にと四方よりの客を

名もなげの草花までも食卓に識者方等の廣き心に

心あれば皆美しとも見ゆるなり種々様々の野の花の上

大正十二年 1923 八月廿九日第四回聯盟總會の爲め
武府出發壽府に向ふ

モンス（白國）の近郊にて

田舍家の蔦に包まるる眞綠の窓には赤きゼラニヨムの花
赤き家に程遠からぬ綠の原茶白黑の牛群遊ぶ

再興のサンカンタン（佛國）にて

漸くに建て初めたるサンカンタン殘る古家の數の少さ

知己の地主方の話

牛馬の排泄物の年經りて牧野になれと牧畜勵むと
數百の羊は汽車に驚きつつ群守る犬の方へと走る
要ありて一日の巴里を君は外我は我用壽府を豫想し（32—8）

巴里の一夕夜テアトル、ノランセー

チチユス、ベレニス、アンチオシユス、ラシヌの筆の名優詩問答

ホテル、ワグラムよりガールド、リヨン(停車場)へ(31—8)

朝霧に眠るが如きチユイルリー翁と犬と歩くのみなり
王世時代の宮殿地、今は公園

朝霧の薄らぐままに見え初むるセーヌの河岸のノートルダム
七百〇九年前建立の古寺、巴里の本山(1939)

ブルゴーギユにて

縱横に山より山と植付けしブドーの畠にブルゴーギユと知る

壽府ボリバージユに安着して(31—8)

見慣れたる人に受けられ落付けば旅館住居の心地さへせず

日暮

赤錦漲ぎる西のジユラの空映りてレマンは黄金の水

翌朝のアリアナ

軟かの秋の太陽受けて樫の下讀書し居れば栗鼠は來りぬ

御國(奉仕)へと世界へもと盡す君と知る我盡さなむ君が爲めにと

輝ける廣間に集ふ孔雀鳥夏の過ぐるを喞つや共に

美しき姿を見せて靜々と我前通る孔雀の一羽

大震災大正十二年 1923 九月一日

重ね來る四方の知らせの嘘なれと願ひてぞ泣く外國の空

東方を拜し上げつつ謹みぬ無言のままに祈り續くる

留守宅を偲びて

山崖に建ち居る家の住む方の御生命如何にと偲ばれて泣く

引かれつつ景色の爲めに確めし家我等の無智と後悔重ぬも

惠まれて心も身もと强まりて悲敷中に我のあれよと

昔より悲しみあれば悲しみの極極めつる自重の人讀む

悲しみつつ倒れぬ樣と此度は聖の上の書をも開けど(7—9)

ジユネーブのウイラを圍める青垣の我育ひたちし天童を思ふ

何となく望みありげに我が心一時安し或子等偲びて

紐育通信

勇み立ち手弱き少女等人の子を救はむものと火にぞ入りぬる

我が守る子等の爲めにと身を捨てて水火に入りて救助せしとか

美しきアマ等の最後よ我守る子等救はむと水火に入りぬ

通信員等

身を忘れ自己が本務に最後まで通信事務を決行せしと

行動見て世界は確知せむ大國民と湧き立ち亂る災害中の

手紙にて知る熟知の少年

一度は役所出づれど引き返し尙と書類を整理し歸宅す

搖るぐ道路辿り〳〵てお留守居の祖母が家にと祖母を仰ぎ得

大正十二年九月十日外務大臣の電報にて河津母上の外親族一同の御無事を知る

如何にしてなくなられしや河津家の我等の子等の母上の君
孫も子も無事なりとては喜べど母失ひし子等が爲め泣く
悪魔なり盲力なるの地震かな手當り次第人も都も
祖母様の亡くなられしと幼子等世の悲しみを知り初めにけむ
それ〳〵と崇むる方や愛する方殘り嘆かるる方の心を

在白國葡公使の手紙の意を（元在本邦公使フレータス公使）

あれ程に働き上げし日本をなぜ害ふや神は何處と
沁々と神信ずるの深き人震災沁みて疑ひ初むも
ある程に學びの進みもあるなれど地球の内部の盲動止めには
親に別れ子をは失ひつまにまで別れし人の數の多けむ

知りあふ中にても

幾方と一家の方が皆々と公舎の下に終られしなど
悲しやと悲しみ語るの人のなし一家諸共の逝かれし方等の
百倍の力を籠めて威勢よく日を夜に繼ぎて働きて試む（8—9）

安達への御手書にて

難有く畏み拜す御委細を御心深き大森男より
白國の御國にへとの同情の深きが程の醵金の程の

醵金をと催し事の數多きさま見るのみにも感謝沁みにし

日曜の朝（9—9）

幼子の車を押せる男親三人の子等に縋られて行く

アリアナの大樹の下

旅人の我にしあれど人々の道よミュゼーよと問はれ來るのは
與へらるるパンを否みて子等去れば急ぎて摘む孔雀の鳥の

美しの首を延ばして孔雀鳥黒庭鳥と餌拾ひ行く

動物園の鹿

人の世のさまにも似たり鹿と鹿一片のパンに角叩きする

六十日目にモンルポー公園に入りて（9—9）

何時來ても花咲き香ふモンルポー悲しき事も一時忘るる

兒等の休日（木）

茸狩の人の爲めとも苔あつめ延び出す茸隱し置きたし

茶と鼠と赤き茸の生え揃ひ芝生を埋むアリアナの園

去る秋の武府のソワギに子等と共茸探しの人も偲べり

茸狩る人に見せたしアリアナの芝生を埋む白鼠の茸

大人さへ足を止めて三つの栗鼠飛び交ふ樫の大枝仰ぐも

第四回聯盟總會の第一日大正十二年 1923 九月三日大震につき

總會の第一日の公開に同情滿つる大演說を議長

林代表より安達代表への御願ありて

プロウオカ挑發され答ふる人を安達にと直ぐの願ひに安達はやむなく

卽座なる此演說の崇美さに滿堂熱し同情溢るる

もてはやし驚かれたり高尙の稀の稀なるデスクールかなと

高意義のかかる演說爲得る人持つ國頓て再興やせむ

震災に付き（"La Gazette de Lausanne）

スキスなる本邦公使の取り敢へずお越されたりし切拔に見る

（有吉公使よりの贈）

世界よりと我等の皆が醵金して御國へ心集むと人言ふ

シャモニーへ（1—10）同行の方等と鏡子

大鈴の頸の飾りの名譽もて名譽の牛が群を率ゆる

牛群の大小鈴の音和してアルプの谷の交響樂の

クリューズにて

やうやくに足許見ゆる黄昏に足不自由人芋の車曳く

ボンヌウイルにて

暮れてより隣村へと乳運ぶ小供の連れの歸宅は何時

此行よりの注意を遠き子等へ

自働車は能力失せて糸如き崖の上道路に停止りたりけり

出發前の自働車につきての檢閲の充分ならぬと悟るも遲し

幸にショフアールの冷靜に難は免れし安否や瞬間

大正十二年 1923 十月十六日

願はれて君勞總の議長にと巴里要爲めに巴府より壽府へ
第五回國際勞働組合

壽府よりアルプ行　十一月二日トーサンの翠アルプ谷にて

亡き人の御魂慰む村々の墓場の花の今日薫しき

紅葉滿つる山と谷とに包まるる青き牧場に牛群遊ぶ

アルプ原紅葉の原となりぬれば谷間の小家も錦にぞ染む

行くままに深霧晴れてサンゼルベー白き雲海の直下にぞ見ゆ

辛じて通り拔けたる深霧は谷間に滿つる白雲の海

海のごと谷を塡むる白雲は辛く通りし山里の霧

雲の上に山の如くに浮く人は世外に立つの思ひもぞする

紅葉ばに彩る錦野に山にアルプの原もアルプの水も

紅葉染む山より山と見過して幾世と積る雪山の裾

先んじて車を避けて牛集む賢しや犬の主人を助くる

待つ要友に巴里經過　大正十二年十二月五日

待つ友と巴里の要々なしつつも夜又晝の寸暇を語學へ

談合の夜の間のなきを幸と我も語學の修養に伴

テアトル、フランセーの勉强

巧妙に巴里の裏面を書き分けて世の癖示すパレートル作(社界問題)

オラス(クラシック)

書き分くる筆の力を名優の音調正し耳への教養

二千年前

盛りなる羅馬の建ちし其原因の人の氣分の溢るるままを

バタイユ作 Maman Colibrie (社界問題)

バタイユの作は凄くはあるなれど道德の基礎へ強き筆引く

大正十二年 1923 十二月十七日リユクサンブール國へ

初めてとリユクサンブールとの御關係あられ初めし日本の御國は 18—11—1923

大家方の御慶事直後に御信任狀ルユクサンブールの女元首の御許

事々に御滿足さまの御美しさの朝廷振りの御立派さの

美しの御待遇の極度さも舊知の佛の公使の晩餐振りも

皇邦代ルの國人を集めきる心深きの晩餐もありたり

ルの一名士のある稱讃なほ近年も稱讃するを聞きたれば

小ホテル大のホテルと使ひ込む君が晩餐にて學び得しと讃

かかること君への讃へにならねども讃へとて皆そが見地現す

ルより武府へ歸れば直ぐに亦リエジ市行に講演招待等

大正十三年 1924 一月十六日法議會へ壽府に

十三名よりなる法議會主宰を請はれて

法議會に壽府へ出張二週間武府に離れて主宰を君は

大正十三年 1924 一月廿七日(日曜)サレーブ(アルプ山脈)

春ごとき日和と我は樂めどスキー背負ふの人の悲しみ

スキー負ひ冬遊びにと山昇る人も多しもサレ(ー)ブの日曜

待ち詫びし冬の遊びも春如き日和の爲めにスキ(ー)負ひ歸るは

ヒニユキレール昇りながらの眺望にはアルプの白峯續きてぞ來る

白黑の鷗は何處レマンの面ビーズの風に荒海のさま
（寒き北風）

ビーズ上ぐ白峯々々の面影をレマンの湖上に今日は見るなり

武府にて昨夕或大官方の君思ふ友等の二三の語

難きこと外國に終はりて其夕より武府の仕事にかかる君見て

閣下ごと大事の要に腐心する方の注意よ夜會などへは

ソワレーや訪問的の小事等普通外交官の所管の事よと

閣下ごとオームデタなる優秀者の御國へ世界への方にとりては
Homme d'État

御疲れの樣とてもなし御能力も崇めはすれど御身體への自重と

たま〳〵に家居し居れば自己がまま我樂みの讀書する我

武府の二月の交際期

交際期織るが如しも案内狀職責完了すの交際方面

儀式より宴會招待等々と眞仕事爲る間の仕事なりけり

地方への事知らするの事業など輕きにあらず君は爲せにし
お越し來る文に答ふる數さへも日に〳〵時を要せし君

或高位の實力の現職の方の晩餐（24—2）

御國花と溫室の藤を冬眞中主人の夫人の我に捧ぐを
御國のと出し心の嬉敷さよと我は友見て堅き握手を
歸館して五度と熱湯に勞はれ萎れし花の眞盛と咲くを

翌朝

藤の花今朝も盛りと思ひしに隙間の風に散り初めにけり
吹き通ふ家の中なる小風にも堪へかねにけむ室咲の花

兒童等の感謝

昔見し我故郷の雪の花今朝ぞ見らるる武府の全市に
久振りに雪に包まる都をば眺めて思ふ樂しき幼時

夕べより降り積りたる雪の花森も住家も白幕の中

雪の花に塡む故郷の昔をば宛然寫すや今朝の此さま

此の雪に兒等は感謝しウオルベー(公園)の冬の遊びに耽り集はむ

雪景色面白しとて部屋閉ぢて茶飲みながらにガラス越しに人

降りしまま美し雪を蹈み分けて昨日に變る森景色見む

降り亂る雪の嵐の遠近の風情や全く故郷のさま

天童愛宕山腹の小學時代も想ひ起して

降り積る雪蹈み分けて指導せし互ひ〳〵の昇校の朝

アルモニーの宴會に行く車中にて
(中流社會の夜會、年に一回、君主方にも臨御あり)

道歩む苦勞の人の多きなり都會は雪を厭ふといふのも

四月の武府、ウオルベー湖邊 (17-4)

春待ちし魚釣人の列座する青柳垂るる水際の長閑けさ

カンブル湖邊

春風の織りなす波の錦をば縫ひ行く群の少女子の舟

公館大階段を飾るルネ、メナルの繪を見て(私品)
佛の大家アカデミシアン

松の緣梢の花も空色も舞ふ少女子等も浮雲の樣

麗はしや梢の花も舞人も緣の松も春を盡して

水の上も暈の雲の棚引けり春の梢と競ふ影美し

親しき處にて摘みたりとて

取り敢へず作りたりとて土筆飯一匙なれどと捧ぐ家人

春の草花

惜めども散り果てにけり草花は美しけれど弱き人に似る

散りながら机の上の草花は色布き染めて香をぞ留どむる

故郷を戀ゆる思ひを歌し得ば身をも心も慰め得むかと

褒め騒す實をば結ぶと我聞けば花は採るまじ森のミルチル
Myrtille

濃き薄きムオーブの色の野アネモーヌ茶色の鉢に赤き机に

草の花摘みとられても怨むまじ嵐知らずに宿の小壺に

定めなき嵐の絶えぬ折なれば摘み行く人へほほ笑むや花

野の花を愛づる餘りに摘みたれど心なしとも我我責むる

眞盛りに花咲く野邊に嵐吹く春の風情を惜しむともなく

森の八重櫻

稀に見る御國の振りの櫻かな訪ふ人なげの淋しさもあり

美しく年毎咲きて外國に御國の花と誇るなるらむ

御國なる櫻をし見ればおのづから曇る心の晴るるをぞ知る

友なくて獨り咲きぬる八重櫻何時此森に誰植ゑにけむ

誰が手にて植ゑにし花か八重櫻木の間の庵賑はせにけり

獨り咲く我國振りの八重櫻ソワギの森の伏屋の軒に

伏屋とて人住むなれば八重櫻嵐の夜半も心強むらめ

伏屋なれ住む主人あれば八重櫻心強けむ嵐吹く夜も

雨風を忍びて咲ける八重櫻せめては愛づる人の多かれ

眼の廻る事を爲つつも自然よりの賜物に耽ける心養ふ

近　年

新なる並木の街の一齊に八重の櫻の飾をもする（1939）

若木なれ美し花の色映えて其床しさの譬ふものなし

櫻木の養苗場處は水の邊の北風避くるラーケン（公園）界に

田　舍　の

頑丈の石の造りの邊には林檎や梨の花の相應はし

花を愛で自然を崇む人などを人は言ふらむ詩人美術家と

咲く花の盛り喜ぶ人などを通常人と見なさぬの常

大正十三年(1924)八月ウイアナにての國際法學會の折

御慶事より墺の大せし御國柄昔しの御品埋藏るさまの

ミュゼーとて宮殿とても代々毎の集り品の祟けさ仰ぐも

有名のシュンブランの宮殿の喜憂の歴史の埋るるとも

Schoenbrunn

ナポレオン一世の御一子

痛ましく羅馬の王の此宮殿に苦しみ盡し終はられしとも

ナポレオン一世の皇子

墺皇帝フランツワ、ジョゼフ陛下

幾十年位にあられ大戰中御崩御の方の御記念等々

1916

墺皇后エリサベット陛下

世を果敢なみ旅行に憂さを御忘れの皇后の宮の御在所も此處

御庭園も歐の御古き皇室と崇められたる樣の溢るる

墺國の大識者方御夫人と友等我等も大切に接待つ

此都は

昔よりの大の都の文明の溢れて招く東歐人を
（此方面の巴里として）

昔よりの大の都の面影は歩む人等の動作にも現ゆ

道や事問ふがままにも維納人みやびやかにも美し佛語に

伴人と我との問ひに路傍人物靜かにも佛語にて教ふ

歩む人の衣の痛みも沁みにけり素振美し崇むのみなり

我等宿の大のホテルは聯邦主一夜のカルトに失せしものとも

夕ざれば何處ともなく美しの高雅の音樂の流れ沁みぬる

墺國にてもチエックスロバキーにても

御國をば代表さるる方々のいと厚かりし心々も

ベネシユ氏にも田舍の城に招かれて共に時過ぐ午餐しつつ
（當時は外相）（チエックの）

夫人へも賠償會議に共處此處に佛の公館にもあひたりしなり

人言

中々と邦家建つるの活動き爲しをと夫助くるの夫人なりとも

大正十三年 1924 八月第五回聯總に君維納より（八月二十七日）
壽府の奉仕に（二十九日）

コルバン夫人邸茶會（11-9—1924）

友多く終に友なし悲しむとウイレー夫人我に說きたり

さもありさもあらぬともどちらとも人の情によるとも思はる

暇つくり慣れし木蔭に心澄め空氣の樣に知識得たしと

知り知らぬ人を集めし茶の會の四方の心を知らるるの美し

心情善く知識ある言語と行動あらば友と寄り來る數の多けむ

遠外國の同伴者なり我身とては事中庸にあやまちなき樣

言語とて知識のなくて叶ふまじ知識も使ふ人の力に
Ly homme

樹下の椅子に或書を見て

誰にさへ情とてあらぬ狼も仲間同志の優しさありと

東京二回に亙る強震ありしを知り

刈られたる羊を神は厭ふとか荒らされし都の風もなきよと

評判の瞬くままに廣がりて雷の如くに響き來るのを

昔よりの知己の名士の亡き方を慕ふが振りも語り出して

贈られしショコラ分けつつ子供等の笑顔や美し滿足げにも

滿足さの表現るる折は何の子とて皆麗はしげに見ゆるなるべし

君が時

數多き食事もありし晝も夜も仕事の間々を縫ひて塡めて

人々が

何時とても我待つ厚き心の原因君が努力の反映とぞ謝す

遅けれど我は來にけりグランジュに殘る錦の夕映偲びて

昇りつつグランジュ殿を眺むれば黄赤綠と秋の錦を

太平を歌ふが如し尾花さへ動かぬ晴れのグランジュの園

美事なる秋の日和を樂しめる此園守に冬は問はれず

盛りなる夕日隱れば忽ちに木は泣き初めぬ衣手は露

百歳餘る大木の如くあれかしと御邦へ世界へと身忘るる君へ
御邦奉仕の爲め

太陽當れどなほも蔭ある綠椅子翁も媼も子等も來にけり

盛觀を盡し切りたる孔雀群アリアナパークを靜々往來のも

我側に留りて去らぬ孔雀鳥我を見知るや友とや思ふか

昨夕の晩餐

一致して安達戴く二ツ會喜び進行む嬉しと語るを

此日頃學びし甲斐のあり〳〵て英語で過す響應會に

草原に長閑に遊ぶ孔雀鳥犬に怖れて叫びつつ飛ぶ

明朝は煙草忘れまじ落葉搔くアリアナ園の人らへのため

パンの端包みて置かむ我待ちて孔雀と遊ぶ家人や凌げむ

年經るも同し感じの浮ぶ我アリアナ去るの正午の折りに

知らぬ間に時は過ぎたり大木の下幾度居ても飽くこと知らぬを

催し用と探險に三十分程のモルチエに行きたるに

道知らぬベルギー人のショッフア故迷ひ〳〵て遠きモルチエ

山の上の茶屋の用ひの催しの可能性かと試驗にぞ征く

通り拔くと佛の稅關怒れどもショフアに罪なし官家の微けさと

密接の國境故に幾つもの稅關通過の要も折には

袋路に車入りたり我庭を拔けて出でよと翁の教示の

導けと翁に言はれ少女子は花抱へつつ我に先立つ

日　曜　(7-9-1924)

美しの山邊の畠の見ゆるなり日曜午後も勢出す村人

メキシコに愛でしコスモス此處に復サボアの谷の小家の軒端に

サボア山分けつつ流るアルブ川辿り遡らばアルブの峯に

サボア、ボンヌウイルの田舍にて

振り落す林檎集めて大姥の孫子相手に日曜活動く

我等顏眺め續けて少女子は牛飼ひながら思案の體。

二疋のみの牛を率ゆる少女子は物足らぬげにも草原眺むは

細やかに國よ何よと擧ばねば牛飼ふ少女幸や多けむ

日曜午後　(14-9-1924)

暇あり午後を外なるアリアナに嬉敷出でて學生の樣に

風に連れ音爲し落つるマロニエの實我ぞ先きにと食ふ男の鹿
（俗名ニセ栗）

靜かなる山の景色を見ながらに落栗競ふ子鹿をも見る

時々と靜かの山を眺めつつ我思ふまま學び暮すも

曇りたる空なる故かアリアナの賑はす子等の聲の低さも

秋風の戰くがままに熟し切るニセ栗は落つ降る雨のごとも

走り寄れる子等を眺むる子鹿等の落つるニセ栗拾ふまもなし

草刈も道具背負ひて歸るなり我も急がむ夜出の支度に

孔雀等も子等諸共に百歳の大木の上に寢り初めぬ

日　曜　(21-9-1924)

降り頻きる雨の日のみになりなれば曇りげ空の嬉しさも知る

美しや子供の聲の泣く聲の鳥の音如し我近き部屋

美しの春の花にも勝るかな秋の錦の大雨あとも

美しの春の花かの紅葉ばの秋の錦の漲り布くも

美しの春の花やの錦葉の雨の後にも映える山の邊

花多き所とぞ知る抱へ行く花の色香のとり〴〵のさま

ジュネーブや霧掩ふさまの優しさの子愛づる母の面影に似る

美しき情包める人如し霧の晴間のジュネーブのさま

日　曜（28—9—1924）

一疋の瘦馬連れて老人の路傍の草に馬を養ふ

親子にて五人揃うて車押し刈りし馬草を運ぶ日曜

時や過ぐと仕事霧中の人々の日曜晴れの野原の友

ナポレオン三世の時懸けたる其當時歐洲第一の橋（Le Pont de Caille）

鶉橋心引き懸く昔しへも遠近山の遠近澤へも

廣き野と小山の梨をオリーブと見なさば全くウンブリヤの景（伊太利）（Olives）

歸り路はシヤンベリオーバン、ルミリーにフレニギー、ウイリー、サンジユリ
アン、ジユネーブ
Chambéry au Bains Rumilly Frenigy Viry St. Julien Genève

山奥の紫しほぜも往き通ふオートの塵に白菊のごと

雨　(29-9-1924)

雨なれど慣れし木蔭の床しさと包み抱へて僥倖祈りて

雨の中歩む我には友とては濡るる鳥の二羽のあるのみ

濡れ初むる我に出遇ひて園守は歴史語りぬ金豚の上

南米のペルーより來る金豚はかもめの友と水泳ぎする

映えもせぬ紅葉の浮ぶ水の上に四方の鷗樂しげに睦つ

我國の家鴨も居りて我の顔も我言葉をも知りぬるさまなる

降り續く雨に籠れる鹿群は我足音に群ひ來にけり

降る雨に小屋に隠るる鹿群も人や床しや我を見に來る

一人二人晴間に見ゆる子供等にものの請ふさまの鹿の哀れさ

雨止めど木の葉を辿る水滴傘打つ音の秋の沁みぬる

出で迎ふ孔雀も今朝は濡れ果てて悲敷嘶ふ石垣の上

歐州にて

孔雀鳥東洋よりの美鳥やと樂み見れと虚榮に響ふ

よく聞く

他の人の功を我物に爲ることを孔雀の羽根に飾るといふを

とにかく贈物には此模様避くる方善し歐洲向には

或都に或後平に或大なる式場にて讀み上げし事につき人言

關係の全くあらぬ人の名出しパオンの尾羽根呈すは何故かと

遠きへの向への縋りの爲めかとも世界の人笑ふ事のあるなど

崇敬の中心たる人

泰然と優しく笑みての寛大の人への崇拜限りなきをも

大正十三年1924九月總會第一日より（一と影第一參照）

歐の二の最大國の其政府社界黨にて長方壽府へ
陳べ出づる大演說は無條件無戰必定主題のさまも
大方の國代表は快く謹聽風の有樣なりし
無戰規定の小委員會成立てり君選まれて主宰者となる
强き君正義を持して動かねばアンダーソン氏手眞似の銃も
（英）

もとよりの戯れ事にあるなれど總ての眞理現はれにけり
委員等も安達憎しと有形の表現的の戯れごとも
確かりとある規定得て國々を縛り置かむと熱意のさまの
誰とても無戰希望の熱意にて其目的に盲進のさま
總て皆無理にも無戰の規定をと奔流するの樣や猛しも
いよ〳〵と堤防の切るる樣なりし正義思へば默し得ぬなり

決心し君は出せり安達案二週の間獨り戰ふ

敢然と聯盟規定に背く理を表示し戰ふ一人の安達

頭腦よき世界の名士等の君が方へ殖えつつ遂に佛のルシュール氏も（大敵なりし）

續き來し安達へ對の現象も雲の樣にも立ち去りにけり

五十餘國君贊成と忽ちに君崇拜の情に浸るも

散會の前夜の會の有樣の四方の人等の君への心の

プロトコル、ド、ジュネーブにて閉會遲れたる總會の最終日

打揃ふデスクールにての會場は平和の樣に春風の吹く

君にへの盡きぬ敬愛人毎の言に行動に溢れたりにし

人　　言

正義へと強き人たる君の持つ國羨しとも敬し上ぐとも

同　　L'homme

強き人いと稀有なるの世なるにと崇め盡すも君が業見て

同

かかる意に事爲し爲さば何事も御國奉仕に功の積むのみ

同

しばらくは君等子孫を休息めても君は盡せり御邦家世界人へと

人のいふ君が奉仕の御邦家への其よりの惠みを世界は受け受くと

大正十三年 1924 十月六日歸武

着の夜は書類來書や一般の社交のものも一見し濟む

何時にても着武の夜は遲かりし眞面目に大體プラン整ふ

道理なり翌朝よりの混雜さえもいはれ得ぬ事々の來て

此折の來書の多き意義深く捨て置くべきのものにてはなし

沈着に用なき樣に君は皆事皆終へて社交の界にも

十月六日壽府より歸武し内外の催し事に四日の間をよく
十一日より學界要に倫敦へ君は歸武得し十七日に
例の如く我も出會ひし四方よりの學者の方の御夫人方に

年の暮頃より

小事なれ遠き子等へと懸け離る遠き此方の暮れのさまをも

クリスマスの夜

茶碗持ち菓子持つさまも子供ごとノエルの夜の心地現すなり
歩む人の凍えぬ爲めと路側もコークス燒くの武府の年暮
落ち付ける國人なれど何となく落付き切れぬ忙はしさの現ゆ
年の末年の始めの贈物の心の入りのさまも一筆
或方が我國風の菓子の禮ブリエール花を我に越せる
暮秋の
懐しのブリエール花の盛り見て冬の心地も忘れられたり

ブリエールの野原を塡むアルデンの高地の夏を偲ばるる今日
高き原へ紫雲の様に浮き立ちて柔らに滿つる此愛らしき花
此灌木もて造り上げたるピープをば幾十となく君は用ひし
ブリエールのピープは殊に柔かに煙草の味をも彌增すともと
御煙草は少量なれど優秀のハバヌの若葉の縒りたるものを
ある方が母様よりの或品と一部を分けてと心あかさる

味はねどまづ取りあへず御心の深きを品の色にぞ見る
遙るゝと送り越されし貴しの品の分ちの我への御心
とり紛れ筆採り得ずに今朝までと過ぎ來し我の愧しきかな

軍相夫人

味ひて是非にと友が南米のチリーの産なるパルムの汁と

御承知の如く贈物の習慣

極々と親しき人はショコラ箱贈りて濟めど大抵は花
一と年の禮の意味にて花贈り來るもありて心のままの

或了解のある社會には時期は私共は邦人故年頭祝賀の
意の方に誠ありと思ひ

意義解ける美し文と邦品を贈呈するの最可なるもと
謹みて自己を省み中庸に贈品を交換すクリスマスの前
國風へと心用ひて友達は年の始めを我に祝ひし

私には年の始めに年祝ふ心に人は心用ゆる

ある方の贈花につきて心に

眞白なる香りの尊き鈴蘭の花赤きリボンと御國の色を
眺めつつ御國の色とムユゲの花色も香も崇しと沁む
美しきムユゲの花にぞ色添へて我國色となせる人君
花を贈り壽ぎ祝ふ易からず撰みなければ祝ふ意味なし

品物の種類や質に沁みずして心入りのに沁み禮すべき
贈るべき品はよくよく考へて過失少なうあるべき希ふを

遠方より越せる飾りナップに心に

頂戴きし御地のナップ布き飾り在せし折の思出に耽く
數多き食事夜會も書き難し心々の厚きが樣も
御世辭とても眞誠の世辭にあらざれば賢き人の心へ感觸得ず

いと遠き國の外なる奉仕者の妻たる我の心得として
とりあへず人の嗜好を知りまほし我嗜好にて人は待たれず
我嗜好む事を人にと及ぼすは人の心を知らぬことなり
我家に幸あれかしと青鳥を贈られたりしは西班牙大使
夜晝と我居間守る青鳥の幸多かれと我を見續く
自己より勵み行かねば幸とても來らぬものと彌我勵まむ

謙遜と出づる形の樣のみに德ありげとも褒むるは如何

謙遜の形の中に無智をば出さぬためのさかしきアクトも

人知りて能力を知りての御世辭なれ世辭にもならむ人に對して

唯々と人の氣にへと入らむとのアクトするなど或位置にては

自重の

海牙滯留の六日間　七月卅一日より八月五日迄

海牙なるアンスチチューの共折の美し事は玆に略しぬ

國際法學會

名にし負ふ古き都の振り〳〵の種々樣々の書く可きことも

幾らかは一端影にありしとも暇ありなば御見直しをも

大正十四年 1925 九月第六回聯盟總會

此年よりは聯盟局の局長の本邦出人の御變更ありたり

ホテル、ボリバージュより引移りたるホテル、メトロポル窓より

朝霧の薄らぐままにジュラの峯アリアナ園とレマンの彼方も

深霧の薄らぐままにアリアナの水の邊の朝ぞ見え初む
花に滿つる園より水とエルマンス(岬)ニヨン迄をぞ我庭とすも

友なる或夫人よりの花

心ある美し花やサロン中香はしつつも友の意語るか
客室

贈られし花を眺めて贈り來し人の心に我の心を
初めての宿處の感じ何となく淋しさうにも旅びの沁みにし

ホテル業巧妙の諺府の忽に我家の心地に我は落ち付く
澄しこみ廊下を歩む幼兒は我一等と健全きさま現す

植物園にて

探し得し珍し花の其木をば子等と愛でにし永田町の庭のを(三十年前)
東京麹町區
强かりし彼の子の影の浮びて來彌强まりて旅行も共にと
彼の人の癒ゆる時をと祈りつつ我は活く爽快に日々

壽府ホテル、メトロホル（大正十四年 1925 九月十日）

遠くへと御國に奉仕ふる人に同伴沈み偲ぶは老人の上
御國へは一月餘り現今の世も經ねば歸れぬ東の極かと
好機や來むと樂しみ待ちし甲斐のなく逝かれし報慕ふ方の上へ
母様の逝かれたるにぞ意氣失せて日に〳〵往くは悲みの道
差上げかねしものを身に着け亡き方の形見と崇め慕ふ外國
手製

花の散り春の往くのを歎くまじ皆命ありと悟り居りても
かくまでに悟り來りし過ぎし道幾春秋の涙に浸りて
幾秋と涙拂ひて勵み來し心の程や待つ人のなし
東へと進むのみなる我心悲しみ積みて我を塡めし

幸に

思ひ入る心を破る物音に襲はれながら我我保つも

澄み渡る月に引かるる思ひせり清き書に依り我を止むる

賢ならず愚にもあらざる途中人苦しみ多し迷ふのみにて

責任なき安き此身にあるなれば他愛もなげに悲しみの積む

同じ場合に

責任に堪へつつ忍ぶ人の上我愧しと我を責むれど

難しき事にと遇へば直ぐに脊せ進み歩めぬ感の爲る我

折々と過ぎし年々「長き滯留中退屈せぬや」との本邦より御來歐の方々の御親切に御配慮被下ての御問ひを偲びて御國へと活動場處の遠外國の人の家庭の容易ならぬも

其人は

覺悟あり此活動も出來るなり總てに秀づる力も要るなり

人として認識めらるるの要のあり其充滿すには脩養の要も
L'homme

何處とて全力盡す奉仕方法認め知りては退屈は我に

爲べき事學ぶべき事數多し飛び行く時の惜しまるるのみ

びし〳〵とプランプランに働く人見るも忙がし仕事せぬ我も

招き來る催し事さへ數多し心緊めねば新紙も讀み得ず

遠き外國に奉仕者の妻としては

全くと違ふ知識を正確に我物と爲る努力要るなり

知見あり同情すべき同情をもちつつ行爲すの易きにあらず

いと遠き外國に仕ふる人の妻或心得のなくてあるべきや

永年の遠き外勤の人に同伴中

徒然の時をと偲ぶ時のなく過せし我の誰れに謝すべき

退屈の感なく過ぐる其原因は祖父父母方の御蔭とぞ謝す

人の言より在武府、紀元節夜會を偲びて

都擧げ君が招待に應じ來て皇國の紀元の大節祝ふ

事盡し心盡しの催しに心を擧げて夜長く祝ふを

和服の御夫人を見て心に

紀元節を祝はむ爲めと特更に鶴の繪衣を君は着にけり

萬代と祝ふが如し御衣の舞鶴群も君に倣ひて

舞ひ集ふ衣の鶴も今日知りて祝ひ重ねむ紀元節の夜

特更に祝はむものと紀元節鶴の大和衣纏ひし君の

ある邦夫人を見て心に

御心を寫せるものか御頸環の眞珠の玉の清き光りは

心ある人々

極々親しきエーマーブルの高位の夫人公館の晩餐後のことを偲びて

障りあるも廣き室々美術品觀覽しなば退屈なからめ

同

ドブリーズのボーレンダンスの鑄造物人々驚嘆仰ぎ續くも

人民　踊

他の方

此作に涙し崇むの大國の大使もありし來るごととも
高雅の詩人

傑作なる馬上蝦取りのムニエの作あら崇しと稱讃繼ぐのも
ペーシュールデクリビス

人言

公館も住む人ごとく稱讃の的ならねばと世界の配慮もと
（各國の競爭の）

衣服正しなほ人正す感沁むの感より世界の國共國の爲めと

同

颯爽しく君は盡せり私財捨てあるべき樣に公館裝備ふも

かかる程人に沁むるの公館の辱なさも嬉しさもとも

私は心に

外よりの眺めは何時も必らずと眞理に合ふの事にもあらず

同

羨まし宮殿ごとと友言へど家人等謹む足蹈さへも

同

事務所土我等住むなり子とてなき人等にしあれ響せぬやと

又いと親切に昔よりの此の家の構造を知り居るある責任の大位置の方

職員殖ゆる公館と思ふ事務所をば外へ持ち得る方法のなきやと

たとへ理正しき都合よき事としても私は心に

繁くとも狭くありても本務存在場處にこそ責任者はとも

同

心ある詞なりとも容易からず事の進むの次第もあるにと

他の方の言

時々は森住む鹿の羨まる日を夜に責任負ふ責任知る人へ

同

鹿群の佇ずむ森の繪などにも繁き事々忘られ欲しと
平和繼ぎ彌榮え增す武府の市端地も盛る中心となる

今　宵　亦

美しの心々の輝きの沁むる詞々我等受けにし
我を顧む忙はしく催しに出懸くる折などを偲びて
一本の針にてさへも慕はるる要する時に見出しかねつつ

曲りなば先づ直すなり幕の裂後引き上げば正しくぞなる
心急けば幕開く（リドー）樣の曲るもあり心治めば曲ることなし
驚かされ働き初むる人多し年々生ふる小虫あるのに
御留守の間虫蔓ると言ふ人の心思ひて謝しつ沁みにし

壽府より自働車にてヴェルダンを經、歸武の際（4—10—1925）

刈上げの畠野を照らす秋の日を背負ふ翁のタバコ吸ふさま

生り重ぬる林檎の枝は地に垂れて折れはせぬやと車中の人

ジュラ山脈ホウシュ近くにて

廻り來るアルプの白峯見ながらに我も雲にと昇る心地す

雲の上に立つ人の如し群々とアルプの峯の我等訪づる

畝りたる山の端生ふる葡萄の園盛りに熟るブルゴーギュの野

通り過ぐブルゴーギュにて

人氣なし戰の爲めか大方の小村は荒れて崩れ居るなり

戰の爲めのみならず若き人都にいづる爲めなりとも

高からぬ小山續きの美しのブの地方の住家の散る樣

靜々とセーヌの河は帶のごとジュラより出でて小村々々を

秋知れる並樹通りて村々と自働車にてぞブルゴーギュ見る

美しの小村居並ぶセーヌ河岸牛は長閑に月を眺むる

ワル、シユゾンにて

初秋の錦の染むる山と谷眺めて嘆く車や速しと
紅葉染む秋の野山の後邊をなほ彩れる虹の七色
美しや廣野のさまの祟けく原も人家も繪の如くして
時節柄犬を相手に獵人は野にも山にも思案の體
今日も復秋の日和の和らかき陽光に我等惠まれにけり

ディシヨン

昔へのブルゴーギユ國の首府なれば何とはなしに重々しさの
市端に追ひ來る人の旅館僕我の時計を持參せしなり

ヴエルダンよりウオーに行く途中

英雄に手向するなりヴエルダンの若木の紅葉山を滿して

フォール、ド、ウオー、の前面にある無名の三兵士の墓を拜して

萬代も記憶するらむ堡底深く失せ居し無名の英雄

默禱

國の爲め正義の爲めにと失せたりし人を惜しみつつ感傷しつつ
永久に教へたれなむ正義と邦家護りつつ失せし英雄の墓
邦家の爲め正義のためにと佛人は四十萬餘もヴエルダンに戰死す
其等の墓其處に此處にと群なして靜かに受くる崇拜の情

知己の方々其御子等もとの來信も

我友の名刺を胸に若人等戰ひ死せし山も此山

一春、壽府より歸路武府に近づきて

久振りに通りて見れば驚きぬソワギの春の曠きものよと
春風の吹き寄する森の若枝にも母をと慕ふ雞鳥の聲
呼び交はす朗らの聲の鳥々も神に謝すやと我も沁みぬる

軟らかの風のまに〳〵若葉森緑の波を送り寄すなり

日毎ごと若葉の色の深みてや青空下の緑の空の

遠近の澤邊の風の軟かき春の樂をと奏すやの今日

鳥の音の交響樂や遠近の梢を渡る春風の音

百鳥の春を歌ふの交響樂彌朗らなり朗らの風に

鳥の音の風のリトムに相和して春の樂爲や五月の森の

美しの若葉を戰ぐ春風は我心をも長閑にする今日

誇り氣に摘みたる菫人に視せ春を歌うて過ぐる一群

武府一秋の一午後

漁人の柳枝の影つる深池に竿を下して時待つさまの

公園の池の邊の落栗へ兒等の面影活き〳〵するも

小羊の數や足らぬと引きかへし池より拾ふ牧夫の犬の

強風も大勢よりの活動かと時待つのみかと書を手に家に

風らばと用意し商店へ と待つ中に時過ぎにけり人受く時來

バルカンの或國の首相の暗殺に 昭和四年 1929 秋壽府にて

去年の秋幾度となく食卓に知りし人なり悲しさの沁む

去年或國の代表大使夫人の言を偲び

野蠻人食方振かと此方をニュースに我は悲哀の感に

擧動のみに人を計るの人もあり總てに人の素養あるべき

人の集まる處なれば

不自由なく其が言語々々を知り得なば魂の玉なる光や認らなむ

昭和五年 1930 三月西より東へ印度洋上

海の上の月を眺めて我が思ふ方の誰もと御健在なれ

四週餘の船路にしあれば冴ゆる夜の月影淋し思ひ増すのみ

船の上も君は書齋に盡すべき仕事を順に着港を待つ

月の夜の波輝きて靜々と空と照り合ふさまの大きさ

月の夜の波靜かなる沖の上の空と浮ぶの偉大のさまも

責任感のある船長

威嚴持ち技術を持ちて其職に情にも富むとの武田船長

歸朝の滯留の短かさをくりかへして

滯京はいと僅かにてやうやくに三ケ月なり遺憾く殘り纎ぐ

兩　人

辱なき御催し事に參內し內親王殿下の食後御臨場も

御陪食には內大臣侍從長其他

下々の人迄知りし事なりし新紙に見えし事なりしかとも

人傳に說明了れりとも察すれど念の爲めにと一筆玆に

其他私一人としても

限りなき難有事にえもいへぬ御待遇等々　大恵みの下

繰返されし大旅行中遙々と移住の同胞を見て

外國に憂さ絶えなまし難有き御國の蔭に浸るにあらねば

いと遠く在外奉仕の人の妻なればと

有る限り出來る範圍に力得て要ある事を婦女子とてもと

流るるも動きも見せぬ深淵に臨むも度胸の据りあれよと

天性の文化の優ぐる夫人等の國事の上への影響をも知る

外國に年重ぬれば重ぬる程御國思ふの心彌増す

外國に年重ぬれば重ぬる程故國の力の映り知らるる

遠き子等へ　歐大戰後

任地も外も君が要務の繁り來て書くも容易くあらぬ此筆

年毎の御活動への端々の御知識あらば御推量をも

大正十五年 1926 より昭和五年 1930 迄は殊に全くと

此年よりは任地に壽府に學會に君が活動書くを控へし

拙くも書き留めたりし一と端を一と端影の筆に見らるるを

昭和五年 1930 樂しき歸朝後國際法廷判事の選擧の競爭の爲め忽ち復來歐の折
或高位の方父上の御繁劇なる御本務遂行につき御親切に

巴駐在の時代や劇務の極にして他への比較のなしと見上ぐと
(巴里)(他の駐在地)

左の御詞辱きことなれど

大抵は自己が知識に立ち據りて事人判斷むやの傾向あるを

父上の高熱有效の御奉仕は

公平の世界の識者方の判斷くごと最近廿年に燃えつつ繼ぎしを

元　旦(昭和六年1931)

東方を拜し上げつつ感謝しぬ二人揃ひて公館の遙拜に

土地柄や御國の春によく似たり松青々と梅の花など

高雅なる和國の人や中々と東洋通に書籍の上にも
（和蘭）

落付きて何時も春なる國振の物賣り人にも現ゆる様なる

和蘭につきては

書くべきの美事の事々あるなれど亦後にもと茲には省きぬ

幾らかは一と端影にも書き初めし暇ありなば讀み返さるるを

昭和六年 1931 正月往來往復書信希望等々

難有き御世を拜してます〳〵と勵むべき身と我我顧りむ

遠くよりの祝ふ意の新年に御健かさの御奉仕盡しを

かかる折在京ならばと遠き身を悲みながら心のみ往く

近き人へ

樂しげに讀みて味ふ君等が筆美し事を知りて嬉しき

同

確かりと人になられむ心にて道の土臺も昔の事も
l'homme

友よりの花につきての書信を見て

冬の間に花咲かせむとの用意して年の始の水仙の水鉢

御深意を謝せむと眺め香はしき香に眈り筆の遲るる

ある意にての來りし謝意

其が毎に世界の智者方の紹介に集ひの會の廣き心を

從來より

かかる事あらぬとのみの豫備知識我過てり式衣の不持參

衣にての人にはあらず申出し事聞かれ欲しとの詞もあれど

出席るのみに事皆濟むの詞にも遠慮し辭退の紳士の習慣を

寄せ來る

美しや大和心を籠めてこそ世に勝れたる母君とも

人も我も唯尊しと仰ぐなり御歌に溢るる高き心を

本務(ドゥアール)に盡す心の暇(ひま)なくも御筆に知らす時の過ぎしを

壽府の友への返し

眺めつつ筆とり行かば詩にもなり歌にもならむ壽府の邊(あた)りの

御美しき綾(あや)なす御筆の尙(なほ)更に壽(ズ)府を我等(ら)に寫し盡すを

伺はむと日々思へどもかれこれと取り紛(まぎ)れての今日にもなりしを

玉のごとき生育(おひたち)つ御(み)子の御(み)姿の御(お)身等(ら)の御(み)心強め行くとも

樂しげに暮したまはむ花ごとき生育(おひたち)つ御(み)子の姿ながめて

來信の意

惜しけれど十日以來の約束の動かし得(え)ぬのを御許しあれよと

同

さりながら訪ね行かなむ君が家へ來る御受けの十一日には

返事

難有し急ぎ書かれし細々の來宅と御受日知らせを

御親切に御揃にての御來訪不在なりしは殘念なりし

御美しき御室の花と眺め上げ深き御心溢れてぞ沁む

御禮をと思ひ續くれど遲まりぬ歷し來る事を片付くる間に

名刺に鉛筆書きの詞を見て

何時とても御豫報あれば喜びて御待ちする樣繰合はすべき我

なるべくは一日位の前々に御知らせあれば好都合なり

或大國の眞面目の立派なる雜誌をよみて

何の世にも何處にてとてともすれば自己が利益と走るが多き

邦家へと民族にへと志し終始貫く人や偉ならむ

細事をととり片付くる間に時の往く日は暮れ果てし外出も爲し得ずに

ふら〳〵と自働車は動く人道へ雨氷なれば不如意のさまを
verglas(外面よりは見易からぬ氷がたなり)

誰とても外部の見えには變りなし内部の變りや學び知るべき

誰とても外部のみ見ればほぼ似れど内部の變りや程知れぬなり

内部といふ人の内部の力にて活動く原の其の原は頭腦(御承知の通り)

持ち居る能力にて

出來る丈唯一筋に心入れ爲べき本務正しく爲べきを

沸き立つる世の有様も眞學者世離れての研究のさま

東西の文明纏ぐ學者等は道德てふものに土臺置くらめ

自重上或國人に劣らぬと人等セルビス來り求むも

儘ならぬ佛國文字の手紙には尙終局の難き知らるる

母様方の心々

其處此處の子を思ひての母樣の心盡しの美し心を
形のみの娘仕立や和洋踊實入りのするのさげすむべきをと
ピヤノとて親の心に天性のなき子に强ふるの人見てはとも
形のみの人の行衛は如何にやと事する時もと人間の育成を

祖父上の難有き御詞を偲びて

御互に研き得べけれ强性間性格上の鍛錬も得べけれ

弱性とては家庭確かりと指導して心の基礎を造り置かねば
歩み來し道も知らずに喜びの日送りするのむきもあるなり
心治め信念に據り進み行く其道こそと自己征くのも
歩み來し世の經路と偲び來て悲しみのあるむきもあるなり

有爲の人

風荒み搖く彼方の森の樣世の波風に搖らるるさまかと

咲きかかる花の嵐に散るさまの世のあるさまを映すなるべく
散らさるる花の痛みの偲ばるる見る悲みは淺きものなり
惜しからぬ生命にあれど偲ばるる人のあるなり我身を思ふ
限りなき惠みの露に子育も惠まれ居ると思ひ居りしに
磨きつつ磨き終らむ玉なりし其人ぞ惜し惜しみ續くる
心もて彼方は如何に學ぶやと來し筆毎に惜しみつ人を

二羽の鳥小松が許に今日も復人慰むや心ありげに
色變へずチユリプの花の一週も美しかりしといふ人夢む
ショパンの物淑やかの樂の音は我願ひをば願ふが如くに
樂の音を願の詞と聞ごしめされ幸あれかしと彼の人の上

霜の花（28—1—1931）

夜の間にと霜に包まる Den Haag（海牙）瑞西の奥の冬の樣なる

眞盛りの春とや愛でなむ霜の花夜のまに〳〵咲きて揃ふを
眞盛りの春とや愛でなむ霜の花庭の梢を籠めて飾るを
故郷の盛りの春によく似たり海牙を塡む今日の霜の花
床しげの雅やかなる都なり雪霜ともに興の彌増す
此ままに朝日照らずば霜の花の奥山振りの殘るなるべし
小枝まで氷りて白らむ薔薇の木に赤き實群れて輝く朝の

住人の雅やかなる振り〳〵のえも言はれざる雅やかさにて
話し合ふ聲々さへも優美なり働き上げし國振りのさま
人民さへ美の觀念に腐心する詞の端々聞え頻くなり

白　雪（1—3—1931）

瞬くに物皆白らむ夕つ方雪の雲間に我等浮き住む
さらぬだに美しかりし遠近の梢の振りを染むる白雪

稀れに見る雪の風情に迷ひてか年寄人の犬と飛び行く

森や家芝生も雪の白ごろも限界廣し月かげ清し

月清く雪の風情を彌増して心に懸る故郷のさま

瞬くに積りし夜半の白雪の清め盡せる遠近のさま

あまりにも美しかりし昨夜の雪悲しとまでに昔蘇み來る

黄昏 (16—3…1939)

漲れる赤の錦のとりゝに色替へ染めて消ゆる黄昏

書き留めむ縫ひも止めむとあせれども難し空掩ふ綴れの錦

海を控ふ首府の海牙の日の入りの空染めなすや限りなさよと

漁夫達の樂しさうにも群なして腰掛の上にて日入眺むも

嵐

忘れの間の揺ぎへ揺ぎ揺ぎつつ時待つ顔の蘆の群々

夜嵐に樫木は折れぬ蘆群は靜まる今朝の眺めに耽くる

春 (1931)

今日も亦緑の增して春の森神を讃ふる鳥の聲する

古くより交はりありし國なれば興味ありげに御國の話も

祖父様に聞きたるままの蘭學の知識の道も語り出せば

婦人方も興味の深く遠東へ祖先の事へ語り出づるも

鍛へ上げし紳士や貴女の振り〳〵の使はるる人にも見ゆる國なり

此國の上流社會とは

何時にても故郷を知るの人やかの話の如き話の出づる

砂山 (3—1931)

部屋中に强く光りの輝り籠めてエジプトよとも思はする今日

眞青の一天張りの大空の緑の松へ砂山へと繼ぐ

海水の持ち來し砂の山々の峯の揃うて都飾るも

此國のと智利とのみの觀物よと砂山保存は古き時より

白(耳義)にては此注意の缺けしとか悔いつつ語る人もあるなり

山巡り用心せよと群つくり實行あれよと蘭友方の

我々は三人揃ひて悠々と松蔭通り早朝より往く

下りては復上り行き砂山の峯より峯と巡る日曜

名にし負ふ砂山巡りの峯多く磁石に縋り三時に歸宅す 午後

花の島 (16—4—1931)

名にし負ふ畑野のさまをと暇つくり今日ぞ出でこし日曜の朝

美しき虹敷き塡むの樣なれやチユリプの花の島の續きは

虹併せ土地を飾るや一面と稀れの眺めに驚かさるるも

春歌ふ花の心はあるなれど人の勵みの惠みの花と

自然にと花咲く原のさまならで生活てふの思ひの深みも

細やかの注意溢るる持主の苦勞の程も咲く花に見る

此の心もちて此の國ます〳〵と陸地も海より拾ひ上ぐるを

明け〳〵に花見せしにや自轉車群早や家路にと花飾りして

照り渡る春の日和の花畑のあらゆる色の光りをぞ現す

運轉士土地の人故巧にも小路々々凌ぎ廣き花野を

入り亂る車を分けて小路中に花見る我等遠く兩側

見渡さる黄赤紅紫と緑に添ふる畠々の面

見渡さるる畠の續きの花の面の黄赤紅紫の映ゆ

夢なれや地に敷く虹の溢れかと驚嘆續くも眞誠なりとも

物事は物いふ人を先づ判じ事の次第を計るのみなり

政論も新紙の種類に判ずるごと先づ種類分別の必要はあり

捧ぐれど强ふるさまなき少女等の花賣り振りや逼らぬ振りの
諸共に我等と我が子此の花を見えしならばと胸の逼り來
榮たね花麥畑縫へる長閑けさのある風情や今日は見られず

暮秋 (29—10—1931)

留守の間に秋の花々失せにけり我家も終に霜の訪づる
秋草の錦の塡む我宿も瞬く霜の荒らす淋しさ

復見むと別れし花は何處にや枯葉となりて家を守れり
世の常と諦め難し瞬くに霜と消え行く盛りのアステル
太陽の見えず霜花盛る海牙の朝人なき里やの靜けさの沁む
故郷の花に似居ると縫ひとりしアステル花の縫地の面見る
慕ひ上ぐ祖父に手取られ朝毎の園の花見し時の偲ばる
縫ひとれる我が業示し批評もと思へど遠し遠東の子

兩親の御德慕ひて事々に我勵むなり外國の空

我が心身も諸共に兩親の一端影と我への自重を

此處も亦我いと樂し四方よりの花てふ人の集まる都に

謝すべきを謝する心に幼時より育まれたる方々に謝す

居ながらに四方の知識を知り集む我身の幸や誰へ謝しなむ

黑鳥　三月の春（8—3—1932）

クロキユスは芝生に萠えぬ春來しと人の心の萠え上がるさま
CROCUS

去年に懲りクロキユス花を守れよと案山子を立つる家の人見る

庭守の案山子の居れば此年はクロキユス盛る春のしるしも

功や著る案子山を恐れ黑鳥も花には觸れず近づき見つつも

何につけエーマーブルの都なり黑鳥のみのアクトには我
（愛嬌ある親切の淑かなる）

アムステルダム博物館

大ミュゼー心を締めて豫備して區別を立てて或部のみ觀る

ランブラン(Rembrandt)の作

力强く特殊の色の影視せて自由に筆の走る大けき
天才の講究積みて繪ける繪畫の共人も現す生國への敬も
大山の動かぬさまの筆の跡夜の巡視を浮かす嚴しさ
繪畫の上にも民族的の氣分をば明らに輝す大家の筆に

或名家等の繪畫を見て

此れ等人驚嘆續く今の世に生活し共當時偲ばれ痛むも

海牙に於ける白國畫師の一共進會

舊知なる繪師の來和の共進會に我時割愛きて午後の時間をば
賣れ行けと時代の阿りの繪畫にあらで自己が嗜好の力盡しを
共が業に敬と愛とを捧ぐるの藝術心の燃ゆるのを見る

信念へと筆を盡すや大畫師の後の世へとの心盡しの

藝術は食得むのみのものならで其技術殘すの主眼へ力を

數々の美事の作や力現ゆ種類も多し優秀れし筆に

薄青地白梅模様の支那花瓶挿す黄菊など高雅の氣のも

夢言　遠き子へ

海牙住第一年春

知る友の知り初むの友の交はりの冬の長きも日速み春來

倦み果てし冬終れりとクロキュスは心朗らに咲き初めにけり

海牙第二年及第三年の冬

吹き續く嵐も何も物ともせず勵み勉めし二年の冬

同　第四年の春

神なしと誰言はれまじ内身等の海牙に住み來夢のごとしも

皇邦へと民族へとの爲めにとて日を夜に勵む海牙の父上
何時とても敬と愛とを一身に集め盡すの人を崇む
御歌をば掲げて我も年毎に朝夕祈る子等が身の上
「御年頭の御歌壁に掲げあり」と父上の御筆
愛らしき手作りものの御子方の心にあつく嚴しき冬も

冬の書齋

要もなき事々書くやの思ひせど近狀を委細の筆も見ゆれば

其後なる外國住の如何にやと筆し憂ふの問ふの方等も
信念を追ひて暮せば忙はし要の書類も整頓しかぬ
我書齋雨後の水路ごと途つきぬ要する紙の集ひ來れる
暝めても夏の日ならば快爽く窓を開きて筆とるべきに
勢籠めて至誠盡して進みし人其所爲しことの皆に敬受く

宗教者にあらぬ人にして

宗教者に崇められたる人にして世界の崇めをも得たるなりとも
國々の識者方等の惜しげなく君が功績を公示するのも

力なき筆なれど

思ひ浮かば其を書き置かむ子等が子等へ導くこともありもせばやと

舊友の情

屢々と我を探して到頭と此番地にと我見出すと

友愛の話の燃えて冬ながら心も身をも熱しきりたり

私共にも

其の夫は在北佛の白政府大戰中の砂糖の御世話も
清楚なる能力者たる次官よと人等語るを耳にす其當時

黒衣の私を見て

最少し總て化粧も思はれて元のごとくに現せませ君よと

此友の意は

悲みの人を失すやの懸念より眞誠の友の心語るを

白蟻の大家屋も崩落すの恐れごと沁み行く日々の悲みの果を

君が言を偲びて

御手紙や心々の思想なりいと崇上げ扱ふべしと

後々にと願はれて

惜しけれど贈與ふべしとて一束の立派の書面立派の方のを

（人として）

祖父様が君に送りし御筆の我ためなりし謙讓のものも

眞誠なる詞も全く眞誠なる手紙の重さと同じなるべし

大寒　（21—12—1938）

窓々は明らみ初めて銀世界月夜の様に物皆視する

世を皆と清め返せる様に似る物氣もなしの清粛々々の夜

えも言はぬ落付振りの粉雪の靜かし氣にも降り續くのには

今日の雪唯靜々と點々と繼ぎし如に地の上に眞直に

名にし負ふマロニエ並木のルイズ街眞白の花の咲きて續ける

柔しげの優美の枝を垂れ上げて白衣に誘るマロニエの並木

探せども人影のなし家の内ストーブ蔭に暖まり居るも

大寒續き　(24—12—1938)

天地に眞白し寒しノエル Noël とて美妙の極の偉なる靜みを

事毎に過すとは落付かぬ暮と寒さの偉きなかとも

繁ければ繁きがままに心締め落付あれと我我に先

人の爲す過失こそは我師とも我畏みて我を導ゝ

一昨夜眠りの前の十時過ぎ水管切れて火竈の火を除く

安眠りての後にてあれば不幸にも火災知らずに終はりしものを

我住家も世間通りに四日目に寒さの力沁みたりしなり

我々は運よきものと感謝せり加護し玉ふの深きことよと

専門の店より態夫に書面越し市廳と絶ちて家の水除けと
水市廳より來る

職人等鼻を啜りて火なき(石)家に水湯の管を繕ふノエル

大寒さ荒しきりたり職人等徹夜の上に電話聞き繼ぐ

家の人我風引かぬやと憂ひ呉るる其痛ましさや友方までも

我家は轉ばぬ先きと一念し自發に人等剛情さを折りて

何事も自發的にと悟る程爲あぐる上に効の多きを

此冬は廿七(年)の寒さにも勝るのみにて出來事多し
(1927)

我住家は砦の如くに家具を築きて包み隙間風除く

零度以下

五より十十五(度)となれり三日目夜家の内さへ手震ふと人言ふ

水湯の管竈の破壊等

我住家は建築上の缺點と多くは夜の炭少なき爲めと
流入るべき水の氷りて家の内流入らぬ爲めに竈割るると

家　人

齒痛み忙しければ着物まで怪我するさまとの心の動きも

淋しき雪の中公園に唯一人の兒童の歩む新紙の寫眞を見て

雪に塡む或野邊地への歩行者かと都忘るる深き思ひも

年　暮

良き年と希望ひ迎ふの用意にも要書くことにも追はるる我かな
心往く遠く親しの人々に繁きに惑ふ年暮るる間も
苦しみを忘れなむとて其方面の薬書や寫眞に我我堅束めど
眠り得ず皆群々とならび來て決定せまるか我を苦しむ

荒るるまま苦しむ小舟や我なれや決定てふの岸も見出さず

兎に角に我盡さなむ我が意志到着し得る港あらなむ

出來る丈我笑はせむと作り出す戯言の多きも我によく沁む

外出得ず體力失すとも言はれても咽喉は全癒れり塞翁の馬

十日間も家に靜まり活けり吝以下十四五度繼ぎし此頃

注意して家に暮せしためなりき去年よりありし咽喉の障りも

過ちの直にと示す方法のみに此家の安全保たるるなり

僅少人と過す我等は大家に間隙なき樣なり落付はあり

順序立て書きて實行待つなるに行ひ得ぬも人の程度と

どしどしと小さき事に氣の付きて大事の事に大忘れすは

祖父上の老職御引退後改名の三省の御字を偲びて

三省までなし得ぬとても二省までなしたらばとも物手離す人

出るにも事定むるにも此字に據り我導くの確なる例
落付は事始むるにも終るにも要の要とは思はるるなり
一筆の通信さへも落付ける心の底の現するとも見ゆ

電話なき友へ急ぎの

案内を直ぐに爲たしと速れども今宵は缺けり印紙の保存
印紙買ふに心痛むの人思ふ世界に多からむと我幸を謝す

年暮續 (31—12—1938)

故郷の四季花亂る小屏風を賑はしげにもシユミネの上に
年暮の祝ふ心の諸共の親しみ笑みつ寫眞など見る
樂しげの喜び溢れ眼濡ふ樣に動きて我亦濡ふ
習慣なき菓子など攝りて茶を共に幼時の現ゆる昔の話も
思ひ續く彼の子はいとど樂しげに暮れ行く年を我と過せり

歸り來て

壁々の繪畫の影までが我迎ふ共賑はしさの賑はしき思ひ

我が好む名畫の帳や裂の色皆我前に集ふ夕方

沈思

茶を注ぎてレモンを入れて砂糖入れ我嗜好やとも我眺む人

花の滿つる都の春への話中共に沁みつつ心飛び征く

同

共々に歸らむ時の樂しさはと無言になりて顏を見合はす

美しき書冊も來り說き出す共樣優し我への慰め

四周年と年の經にけり謝し上げぬ心も身もと强み來しをと

大寒後の菊

枯木も庭の賑ひかと

長き冬厭ひし垣の枝なども青みの初めて現えかかるのも

何時までも芽出の遅き菊なりと道理なりけり總て寒さに

白菊の鷹揚しさの美しやと根分け請ひたる友へも請ひたく

惜しむまま絶えなむと現ゆる菊の跡種子の若芽と探す心の

跪き何を拜すと疑はれむ朝毎屈む菊の芽探しに

用もなき苦なる家に束の間も心緩まず人怪しまむ

輕からぬ本務盡さむ思ひにて電話も隱し時を保つも

山櫻と安く思ひし我なれど會ふの何によの文の集まる

難有き　大御惠の蔭に仕合に外國ながら我を保持ちて

忘れじと誓ひし人等忘れずに悅び集ふほほ笑む家に

年經れど友情のみは彌增して若がへり來て進むのみよと

強さうに見ゆる姿と嬉しげに握手も強く心もあつげに

何時とても忝なしと思ふのみ心失せずに君を偲ぶを

秋の來訪者の言を偲びて

逝きし人の愛でにし花と沁みしよと養ひ纒くにや武府の御庭に

菊育て花を愛でつつ逝かれたる人を慕うて手向すやとも

菊の花盛りて香る秋の庭御國の御名をも高めつるなり

旭日の形し居ると黄の菊をあら珍品と眺め凝るのも

言はねども我慰むと諸菊の映え合ふ色の我庭の秋

アヴニュー、ルイズの我家の庭初春

花のなき春の初めの庭なりと憐まれむも黒鳥頻きて

海牙のみの黒鳥とのみ思ひしに明くれば撒むクロキユスの花

兩隣の猫の居据り我庭を護りはすれど黒鳥強し

庭の面溢るる光陽の彩れる芝の小花の愛らしきかな

若蔦の時節につれて雨毎に青み増し來る石垣の面

艶々と塗物の如し石垣の蔦の綠の雨の晴れあと

降り頻きる雨の晴れ來て憂ひたる菊の青芽の見え初むる今朝

靈驗と喜びあへる菊の芽の土より出るを黑鳥の撮む

靜まれる鳥の宿なる庭の内菊の芽萠えぬ鳥撮み初む

來む秋の菊の花をと希望ふ友等は嫉しと黑鳥を見て

漸くの春に雀躍る黑鳥の菊の新芽とても容赦せぬのも

雛鳥の捕はれかかる其瞬間親鳥防禦ぐ猫への抵抗

震ひあがり猫は獲物に觸れずして刺されぬ中に逃げ出すさまの

我庭へと群集ふ鳥々猫のかず靜けさ著るし自由のさまの

我庭によく現ゆるなり御承知のラ、フオンテーヌの種々の舞臺の Scène

（ルイ十四世世嗣の御時に此御方の爲めに書きたる動物に擬し人事を說きたる書）

パークの春休(當年のパークは四月九日) 1939 人々に親切に
言はるれど

大切に保存ち遂げむと記念旅新し旅への心とてなし

何れとて皆意味ありし備はりし心引締む旅にてありにし

新紙

主義了解り居れども尚了解る理のゆくままに水流るるごと

理に依れば研めずとても悟るらむ蹈むべき道へ蹈み得しなりと

暇あれば雨多しとの氣の付きもあるなり、ともと我我顧りむ

何の花も太陽望むならむ其が向へよく生きたしとの自然の望みの

春休盡して歸る自働車人絶ゆるまもなし此並木街

武府の田舍　五六月

吹く風のまにまに流るる若宇津木居並ぶ伏屋包み軟ぐ

年々の緑の樹々と居並べる赤葉の楢の櫻ならぬを

春風に押流さるる宇津木花紅白色の波を立てつつ
春風に揺らるる垣の宇津木花紅白波の畝りの如きも
紅白の波を畝らせ春風に漂ふ宇津木の優しき振りの
微風に宇津木の花のふはふはと調和しながら紅くも白くも
風のまま紅白宇津木のそよそよとリラの梢へ小波打ち寄す
愛らしき宇津木の花の御話より遠き昔を偲びしを想ふ

淑かの宇津木の花は我等へと心語るや風のまにまに
淑かに咲ける宇津木の紅白花君が幼時を我に説く如
孝子なる君が愛せし宇津木花紅白色の盛りを茲に
春霞消ゆるがままに巣籠りの小鳥の習ふ羽ばたきの様
カンブルとソワギの森の春の色連峰ごとく霞より出づ

子等へと手紙（5—5—1939）